



公益財団法人 京都新聞社会福祉事業団 活動パンフレット



2026年2月



京都新聞社会福祉事業団の活動

京都新聞社会福祉事業団は、1965年（昭和40年）、京都府・滋賀県における地域福祉の発展に寄与することを目的として、京都新聞社が取り組んできた社会福祉事業を統合し、財団法人として発足しました。

皆さまから寄せいただいた温かいご寄付は、当事業団の福祉活動を通じて、京都府・滋賀県の地域福祉を支える大きな力となっています。

さまざまな事情により学費の捻出が困難な生徒・学生を支援する「愛の奨学金事業」、障害のある方の自立や社会参加を応援する「障害のある人のための事業」、高齢者の生きがいづくりを支援する「高齢者のための事業」、子どもたちの健やかな成長と明るい未来を支える「子どもたちのための事業」、子育てに悩む母親を支援する「子育て応援事業」、福祉団体・施設などの活動を支援する「福祉活動支援事業」など、地域に根ざした幅広い福祉活動に大切に活用させていただいております。

皆さまのご厚意を心より感謝申し上げますとともに、今後も「ともに生きる」社会の実現を目指し、より一層、地域福祉の充実に努めてまいります。

1

奨学金

2～3P

2

障害者

4～9P

3

高齢者

10～11P

4

子ども

12～13P

5

子育て

14～15P

6

福祉活動
支援

16～17P

7

顕彰

18～19P

1

奨学金



◆京都新聞愛の奨学金（贈呈式7月）.....2-3頁

京都、滋賀に在住する高校生、大学生、専門学校生らを対象に、返済不要の奨学金を支給しています。本事業は、家庭の経済事情などにより学費の捻出が困難な生徒・学生を支援するために、当事業団の発足以来、61年にわたり継続しているものです。

●奨学金は、以下の4つの部門で支給しています。

- ①一般の部（公募） ②交通遺児の部（公募）
- ③定時制・通信制高校生の部（公立高校から推薦）
- ④児童養護施設の高校生への奨学激励金

●支給額は、高校生一人あたり年額9万円、大学生・専門学校生には年額18万円を支給。児童養護施設（京都・滋賀の17施設）に在籍する高校生には奨学激励金として3万円を支給しています。

●2025年度の支給実績

- ①一般の部：209人（計2,808万円） ②交通遺児の部：10人（計162万円）
- ③定時制・通信制高校生の部：11人（計99万円）
- ④児童養護施設の高校生への奨学激励金：141人（計423万円）

合計371人に対し、総額3,492万円を支給しました。

児童養護施設の高校生への奨学激励金（2025年7月28日付 京都新聞朝刊）

京都府、滋賀県にある全ての児童養護施設で暮らす高校生を対象にした京都新聞社会福祉事業団の「奨学激励金」贈呈式が今月5日、京都市中京区の京都新聞社で行われた。「愛の奨学金」他部門受給者と申請者のいない1施設を除く16施設の高校生141人分総額423万円が贈られた。市民や企業、団体などからの「児童養護施設・乳児院等の子どもたちのための寄付」を基に1人3万円を贈っている。

贈呈式には今回初めて、代表生徒が各施設から施設長らとともに出席し、激励金が白石真古人常務理事から直接手渡された＝写真。

白石常務理事は、寄付者からの思いをまとめた応援メッセージを伝え

奨学激励金423万円贈呈

京滋の児童養護施設高校生へ



激励した。同事業団では、奨学生の感謝の気持ちや施設からの寄せ書きなどを寄付者側に伝えており、「寄付者の思いが生徒たちに届き、生徒たちの健やかな成長がまた新たな善意の寄付を生む『思いの循環』が生まれることを通じ、持続可能な福祉社会の形成に貢献していきたい」と合わせて伝えた。出席した施設長らは「寄付者の皆さんの応援が生徒らにも伝わったと思う」と話していた。



2025年度 京都新聞 愛の奨学金 贈呈式

(2025年7月22日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ 京都新聞「愛の奨学金」贈呈式 ◆

都新聞社で行われ、物価高騰の厳しい経済状況下、将来への目標と希望を抱いて学ぶ京都府・滋賀県内の学生・生徒計371人に総額3492万円が贈られた。奨学激励金も同日、16児童養護施設の高校生141人が代表生徒らに初めて直接手渡された。

奨学金の内訳は、公募一般の部で高校生106人、大学生・専門学校生103人、交通遺児の部で高校生2人と大学生・専門学校生8人、公立高が推薦した定時制・通信制の部で11人。

公募による一般の部の申請には高校生207人と大学生・専門学校生192人計399人があり、ひとり親家庭が半数を超えた。

大藪俊志・佛教大教授、石川絢嗣・京都青年会議所理事長、横江美佐子・京都市南青少年活動センター所長の選考委員3人が、成績や作文などで将来への思いや現在の学業に対する意欲をくみ選んだ。

贈呈式は3回に分けて開かれ、白石真古人常務理事と寄付者代表らが代表生徒に奨学金を手渡した。常務理事は奨学金の趣旨や選考の経過などを説明。多くの寄付者からの言葉も引用し、「その思いを胸に、夢や目標に向かって歩

371人に3492万円 奨学生に直接手渡し

んでください」と話した。

大藪選考委員長は「多くの善意に支えられた奨学金を有意義に活用してください」と横江委員は「これから先も厳しい状況に直面した時には助けを求めてほしい。助けを求められる人は人を助けられる人、人に手を差し伸べられる人だから」と激励した。

奨学生を代表して2人の学生が謝辞を述べた。京都市立芸術大の安原添菜さんは「音楽を通して世界中の人に勇気や希望を届けられる歌手」を目指して音楽を学んでいる。「さまざまなことに挑戦し、何事にも全力で取り組みたい」とボランティア活動にも励み、昨年は「平和を考える」チャリティコンサートを開催。京都市在住の



代表生徒に奨学金を手渡し
白石真古人常務理事

「感謝胸に音楽の道精進」

「苦境に負けず頑張る」

ウクライナの人たちに募金を届け感謝された。今秋には交換留学で英国に渡る予定で、奨学金はその準備の一部にも活用するつもりで「支えてくださる皆さまへの感謝を胸に日々精進してまいります」と結んだ。

舞鶴市出身の高梨力麻さんは、京都市内で一人暮らし。中小企業の支援を行いたい気持ちから税理士を目指して龍谷大で学んでいる。経済的な事情などで通信制高校、短大、4年生大学への編入を経験しており、「皆さんがそれぞれの事情がある中で頑張っていることを、本奨学金の報告で知ることができた。私とは違う境遇に立つ皆さんだと思いますが、私も負けずに頑張ろうと思います」と話し、感謝の思いを伝えた。

同奨学金は、事業団が発足した1965年以来続いている。高校生は年額9万円、大学生・専門学校生は同18万円が返済不要で給付される。奨学激励金は一人3万円が贈られた。(ライター 山本雅章)



◆障害のある人のための事業

障害のある方々が社会の一員として自立し、豊かな生活を送るためには、就労支援や文化・スポーツ活動の機会を広げることが重要です。当事業団では、障害のある人の社会参加を促進し、生活の質の向上を図るため、就労支援、体験活動、スポーツ、芸術文化など多岐にわたる事業を展開しています。

◇助成事業

「京都新聞夏季キャンプ・レク活動を応援」助成（6～9月）

障害者団体や支援グループなどが実施する宿泊を伴う、夏季のレクリエーション活動を助成

◇催 事

「京都手話フェスティバル」（2月） 5 頁

手話の普及と発展を目的に、手話スピーチコンテストや手話アトラクションを実施

シンポジウム「障害のある人の就労支援」（2月） 6 頁

障害がある人の就労支援について考えるシンポジウム

「みんなで海釣りー障害のある人の体験講座」 7 頁

（9月／1泊2日・宮津市 京都府立海洋高等学校 桟橋）

障害のある人の余暇活動の支援をする1泊2日の海釣り体験 神戸新聞厚生事業団と共催で実施

「京都新聞おでかけ公演・障害者団体」（3月で2カ所） 11 頁

障害者施設に演奏家らを派遣する出張型公演事業 障害者施設と高齢者施設で開催

◇障害者スポーツ事業 障害のある方々が参加できる多彩なスポーツ事業に取り組んでいます

全京都障害者総合スポーツ大会（6～10月／京都府内各地） 8 頁

7競技（卓球バレー・卓球・水泳・陸上競技・アーチェリー・フライングディスク・ボッチャ）を実施

天皇杯 全国車いす駅伝競走大会（3月／国立京都国際会館前－たけびしスタジアム京都）

全国の車いすアスリートが集結する全国規模の駅伝大会

京都ゆとりスポーツの集い（10月／京都市障害者スポーツセンター） 9 頁

京都府内の精神科病院やクリニックの患者同士がバドミントン、モルック、スクエアボッチャ、卓球を通じて、交流を図る大会 ※2024年度は、5月にソフトボール大会を開催しました。

パラアーティスティックスイミングフェスティバル 9 頁

（10月／京都市障害者スポーツセンター）

障害の有無に関わらず、ともにASを通じて交流し、技術の向上を目指す大会 など

京都手話フェスティバル

(2025年3月17日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ 第20回京都手話フェスティバル ◆

聴覚障害者問題への関心を高め、手話スピーチで生き生きと語る機会として「京都手話フェスティバル」が2月23日、京都市中京区の京都新聞文化ホールで開かれた。第20回という節目を記念して特別賞が贈られ、海外でも公演した「ホワイトハンドコーラスNIPPON京都チーム」が元氣いっぱいパフォーマンスを披露した。

京都府聴覚障害者協会と京都新聞社会福祉事業団が主催した。一般の部にはサークルや地域団体などで手話を学ぶ11組、高校生の部には3人が「未来に向けて」などのテーマに沿って、子どもの部は自由テーマで8人が手話でスピーチした。

一般の部で最優秀賞に選ばれた



笑顔で妻に「オハヨー」

手話で語り合う朝

のは英語講師下田奈都子さんだった。英語教室でのコーダと呼ばれるろう者の母をもつ生徒が体験レッスンを1人で受けたエピソードがきっかけで手話を学ぶようになったという下田さんは「私の教室にろう者のお母さんとコーダの子が来たら、全部手話で説明をしたい。お母さんと直接話したい」と目標を語った。

難聴の夫婦とともに手話を習っているという88歳の小野昌有さんは特別賞に輝いた。「朝起きて笑顔

でオハヨーと手話で声をかけます。100歳まで元気で習い、いつまでも手話を使って夫婦がなかよくともに暮らしていきたい」とスピーチすると客席からひととき大きな拍手がわいた。

高校生の部で最優秀賞に選ばれた京都八幡高の山下心優さんは、ボランティア活動で子どもと接した体験にもとづいて「将来は作業療法士になり、障害のある人が少しでも過ごしやすい環境をつくりをしたい」と夢を伝えた。

「未来」テーマにスピーチ、交流

一般の部と高校生の部では他にも次の皆さんが入賞した。

【一般】優秀賞 荻野志穂▽京都新聞社会福祉事業団賞 山花晴喜【高校生】優秀賞 長井優奈。子どもの部の8人には記念品が贈られた。

審査委員長の吉田航・京都府聴覚障害者協会会長は「テーマの『未来』からとても元気をもらった」と講評したうえで、特別賞について「100歳までがんばるという小野さんに負けない気持ちを私たちも抱き続けたい」と敬意をこめてたたえた。

アトラクションで登場したホワイトハンドコーラスNIPPON京都チームは、障害のある子どもも参加する。手話言語をベースに表現する「サイン隊」と合唱の「声隊」が、北区の寺院や京都女子大を拠点に練習している。発表の機会は京都市など国内にとどまらず、オーストラリアの首都ウィーンで公演したこともある。

この日は「だれにだってお誕生日」「花は咲く」などのレパトリーを、時には客席まで降り立つパフォーマンスや明るく豊かな表情、手や体全体の動きを交えて表現した。

●審査員の林丘寺副住職の天野弘堂さんから特別賞が小野昌有さんに贈られた(京都市中京区・京都新聞文化ホール)

●豊かな表現でパフォーマンスしたホワイトハンドコーラスNIPPON京都チーム

シンポジウム障害のある人の就労支援

(2025年3月11日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭柏樹

◆ シンポジウム 「障害のある人の就労支援」 ◆

障害のある人の就労支援を考えるシンポジウム（京都新聞社会福祉事業団主催）が2月16日、京都市中京区の京都新聞文化ホールで開かれた。障害者雇用をすすめる地元企業の経営者や働く当事者、サポートするネットワーク関係者らが講演し、取り組みが紹介された。家族や支援者も含め約110人が参加、雇用を前にした職場実習の重要性など環境整備や支援機関との連携、現状での課題についても認識を深めた。

初めに白石真古人・同事業団常務理事が「このシンポは、障害者が地域の中でいきいきと働き、普通に暮らしていける『共生社会』の実現を目指して15年前から開催している」とあいさつした。

講演1部では、京都中小企業家同友会理事で、自らも重度と軽度

シンポジウム 障害のある人の就労支援

主催：公益財団法人京都新聞社会福祉事業団 後援：京都市、京都市労働局、京都市障害者就業・生活支援センター、京都中小企業家同友会、協力：GoGoネット京都



参加者からの質問に答える講師の（左から）芳賀さん、渡邊さん、当事者の3人（2月16日、京都市中京区）

の知的障害のある双子の高校生を持つ芳賀久和氏が、その立場を踏まえ、「障害者雇用における中小企業と地域との連携」の題で、雇用や家族支援に取り組んできた経験や思いを話した。

芳賀さんは「同友会は人を企業や地域の中で生かしていくことを考えている。働きにくさを抱えている人たちの働きたいという思いを、環境整備などをテーマに話した。

昨春高校を卒業して清掃作業に従事する当事者は、午前6時半や7時に仕事の現場に入るには4時半、5時に起きることもあるが、

い、意欲をしつかりと応援していきたい」と話し、具体的な事例も紹介。障害者雇用では「雇用した人とのコミュニケーションの向上、職場全体の離職率が低下した」などの効用もあげた。

2部では職場実

雇用前の体験・実習の必要性を認識

また職場実習については「職場の人が親身になってくれているのを感じた」と振り返った。実習に関して、終盤の質疑応答で芳賀さんは「企業と当事者をマッチングする場合、雇用を求めているのか、体験しに来ているのかを職場側が見極めることも大切」と言い、渡邊さんは「採用の時には、働く能力というよりも会社に向かうかどうか、他の同僚と合うかどうかを考えることが大切」と指摘した。

さらに渡邊さんは「障害者の能力を生かせる職場とはどういうものか。重度障害者の幸せな社会とは何か。働く事例を増やしていくことで認識を変えていくことが必要では」「企業からのニーズがどれだけあるかわからないが、まず環境整備が必要。労働力がひっ迫している状況は、障害者などいろいろな人が働くチャンスでもあるととらえている」と続けた。当事者は最後に「社会では障害者として見られることが多いが、可能性のある人と見てほしい。本人の自己肯定感にもつながる」と締めくくった。

（ライター 山本雅章）

職場全体の離職率低下

会社、同僚と合うかどうか

みんなで海釣り-障害のある人の体験講座

(2025年9月29日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ みんなで海釣り
— 障害のある人の体験講座 — ◆

「みんなで海釣り-障害のある人の体験講座」(主催・京都新聞社会福祉事業団、神戸新聞厚生事業団)が13、14の両日、宮津市で開かれた。京都、滋賀、兵庫の3府県から介助者を含め56人が参加、ボランティアから114人も加わり、府立海洋高校校橋で多種類の魚を釣り上げた。同講座は自然の中で伸び伸びと野外活動を楽しんでもらおうと1998年から開かれていた。

13日は、同市の府立青少年海洋センター・マリニアで開講式があり、府立海洋高校生が講座(〇)の不思議を開き、実習などを通じて学んだ岩ガキ、海ごみ、ナマコの3テーマで話した。岩ガキは、実際に経験した採苗器を使った作業や市場に「上場」するまでの流れなどを発表した。海ごみでは流

主な協力団体は次の通り。

【後援】京都府、宮津市、宮津市社会福祉協議会、KIDS京都

【協力】日本釣振興会近畿地区支部・京都府支部、全日本釣り団体協議会、京都府磯釣連合会、MFG、GFG、京都府漁業協同組合、訪問看護ステーションふおすたあ伏見

【協賛】アサヒフーズ、がまかつ、東レ・モノフィラメント、ハヤブサ、マルキュー、マルゲ



雨の中で車いす参加者もチャレンジ。カマスを釣り上げた

泡スチロールやマイクロプラスチックが海洋と生物に与える悪影響を指摘。ナマコは生態や生物的特徴、食餌としての歴史を紹介した。夜には釣りインストラクターの釣り講習があり、魚の釣り方や危険な魚の見分け方、救命用具のつけ方などを学び、本書に備えた。

14日朝には海洋高に移動し、雨の降る中で約50人の海洋高生・教職員に加えボランティアらが釣り道具や仕掛けの準備を整え、参加者は、雨具の上や下にそれぞれ救命胴衣をつけて校橋で竿を並べた。

釣果は例年より良く、午前9時の釣り開始時から比較的大きなキジハタやガシラ、チヌなどが次々と釣り上がり、校橋のあちこちで歓声が上がった。

海洋高生と京都府磯釣連合会会員らは、参加者の様子や上がる魚の種類に目を配りながら、餌をつけたら、魚を網ですくって針をはずすなど介助に取り組んだ。

電動車いすに座り雨具をすっぱ

雨の校橋、170人が交流 海洋高生ら熱心に介助

釣果上々、歓声上がる

りかぶって挑戦していた京都市伏見区の土井孝浩さん(40)は何度も参加して慣れた様子。「この程度の雨は気にならない。釣りはやっぱり楽しい」とカマスなどを釣り笑顔だった。山科区から参加の西村幸さん(24)・ちとせさん(62)親子は、ボランティアの手助けで大きなアカウを釣り上げ、重量の部で表彰も。「アジも20匹以上釣れ、釣れた時のわくわく感や手応えがおもしろい」と話した。

京都府磯釣連合会の瀬近公次郎会長(58)は「今年はアジやカマスの釣れ具合がよかった。アカウやキジハタも形のよいものが上がった」と全体の釣果を評価していた。表彰式では獲物の計量と採寸結果に従い上位入賞者に釣りさおなどの賞品が贈られた。



親子で協力して楽しい釣り。形のいいキジハタも上がった(写真は、いずれも14日、宮津市)

全京都障害者総合スポーツ大会

(2025年6月30日付 京都新聞朝刊)

「第45回全京都障害者総合スポーツ大会」が22日、京都市北区の島津アリーナ京都で盛大に開幕した。総合開会式のあと、卓球バレー大会が開催され、31チーム241人が参加して熱戦を繰り広げた＝写真。

同大会は、障害のある人たちがスポーツを通じて健康と体力の維持増進を図ることを目的に、京都障害者スポーツ振興会、京都府、京都市、京都新聞社会福祉事業団など9団体が主催している。この日を皮切りに、10月13日までに卓球、水泳、陸上、アーチェリー、ボッチャ、フライングディスクの7競技の大会が府内各地で開かれる。

卓球バレーは、一般、学校、施設の3部門で行われ、施設の部に出場

全京都障害者総合スポーツ大会開幕

卓球バレー集中の熱戦

だより事業団

した洛南Bチーム（南区）の棚橋弘美さん（64）は、「チームのみんなと協力して楽しい雰囲気です。来年はもっと成長して、また参加したい」と話していた。

各部門の優勝は下記の通り。
一般の部＝西陣工房、学校の部＝鳴滝B、施設の部＝西陣工房B



京都ゆとりスポーツの集い

(2025年10月21日付 京都新聞朝刊)

心の病を抱えている人たちがスポーツを通じて交流する「京都ゆとりスポーツの集い」が10日、京都市左京区の市障害者スポーツセンターで行われ、約120人が参加した＝写真。

精神科の病院やデイケアに通院、通所している人の健康増進や社会参加促進を願い、府内の精神科病院やクリニックでつくる実行委員会と京都新聞社会福祉事業団が共催し、45回目。

昨年まではソフトボール大会を行っていたが、参加者のニーズに応じようと今年から内容を変え、バドミントン、卓球、モルック、スクエアボッチャの4種目の競技を行った。各競技では、好プレーに歓声や拍手が沸き上がっていた。

事業団
だより

4種目で交流沸く
「京都ゆとりスポーツの集い」



今回は7施設が参加し、選手たちは試合を通して交流を深めた。

実行委員会事務局を務めた京都民医連あすかい病院の福田寛さんは「参加者のニーズに応じて今年から競技内容を変えたが、多くの人に参加してもらえてうれしい。患者さん同士が交流する機会となっているので今後も続けていきたい」と話していた。

パラアーティスティックスイミング フェスティバル

(2025年10月13日付 京都新聞朝刊)

技術向上、交流熱心に

パラASフェス、8都府県から110人

事業団
だより

障害のある人となない人がともに演技する「第33回パラアーティスティックスイミングフェスティバル」が5日、京都市左京区の市障害者スポーツセンターで行われた＝写真。

フェスティバルは日本パラアーティスティックスイミング協会などが主催し、交流と技術向上を目的に開いている。

今回は京都をはじめ、宮城や東京、石川、愛知、兵庫など8都府県から8歳～80代の計約110人が参加し、13団体がソロやデュエット、チームなど5種目に分かれ28演技を行った。

チームの部では、障害のある人となない人が音楽に合わせて足を水面から垂直に上げる動作や、列や輪になるなど、



さまざまな隊形を演じた。

参加者は日頃の練習の成果を発揮し、華麗な演技を披露した。観覧席からは演技が終わるごとに拍手が送られた。

印象深かった演技に贈られるナイスパフォーマンス賞には、ソロの部で辻本千紘さん（京都府）、デュエットの部で三島知香さん・池谷雅江さん（同）、チームIの部でスマイリーサン（東京都）が選ばれた。



◆高齢者のための事業

少子高齢化が進む中、高齢者が安心して暮らせる社会の実現に向けた支援が求められています。当事業団では、高齢者の生活を支えるため、外出機会の創出、介護用車椅子の贈呈、在宅福祉支援など、さまざまな事業を行っています。

◇助成事業

在宅高齢者福祉サービス支援「ホームヘルプサービス活動に関する備品助成」.... 10頁
(12月)

在宅高齢者へのホームヘルプサービスを行う非営利団体に対し、福祉・介護用品の購入費を助成

「高齢者へのプレゼント」贈呈(2月) 11頁

特別養護老人ホームへ介助用車いすを贈呈

◇催 事

「京都新聞おでかけ公演・高齢者団体」(3月で2カ所) 11頁

高齢者施設に演奏家らを派遣する出張型公演事業 高齢者施設と障害者施設で開催

ホームヘルプサービス活動に関する備品助成 (2026年1月19日付 京都新聞朝刊)

京都新聞社会福祉事業団はこのほど、高齢者の在宅福祉サービスを行う非営利の団体や事業所を対象にした「ホームヘルプサービス活動に関する備品助成」で19団体(京都市1、京都府14、滋賀県4)に総額137万7503円を贈呈した。

同事業は、在宅高齢者への福祉サービスの充実を目的に、介護用品や福祉用具などの購入費を10万円を上限に助成している。助成金は、移乗シートや非接触型体温計、血圧計、使い捨て手袋などに充てられる。

助成先は次のとおり。

H O P E 300宇治憩の家事業所(京都市伏見区)、福知山市社会福祉協議会訪問介護事業所(福知山市)、綾部市社会福祉協議会訪問介護事業所(綾部市)、亀岡市社会福祉協議会

19団体に
在宅介護の
質向上へ
助成金贈呈



ホームヘルプセンター(亀岡市)、長岡京市社会福祉協議会きりしま苑(長岡京市)、蔦々、京丹後市社会福祉協議会久美浜支所(以上、京丹後市)、南丹市社会福祉協議会ほほえみ八木訪問介護事業所、南丹市社会福祉協議会ほほえみかぐら訪問介護事業所(以上、南丹市)、木津川市社会福祉協議会ケアセンターハッピーコスモス(木津川市)、大山崎町社会福祉協議会(京都府大山崎町)、京丹波町社会福祉協議会ヘルパーセンターほほえみ(京丹波町)、北星会与謝の園訪問介護事業所、与謝野町社会福祉協議会介護事業所、丹後福祉応援団訪問介護事業所(以上、与謝野町)、近江八幡市社会福祉協議会ヘルパーステーションあづち(近江八幡市)、栗東市社会福祉協議会訪問介護事業所(栗東市)、甲賀市社会福祉協議会ヘルパーステーションこうか(甲賀市)、日野町社会福祉協議会ホームヘルパーステーションひだまり(滋賀県日野町)

高齢者へプレゼント

(2025年3月11日付 京都新聞朝刊)

京都新聞社会福祉事業団は、「高齢者へのプレゼント事業」として京都府、滋賀県内の特別養護老人ホーム7施設に介助用車いすを各1台贈呈した＝写真。2008年度から毎年実施し、贈呈数は299台となった。

企業や団体からの本紙「記念日おめでとうコーナー」や高齢者事業協賛寄付金などを原資にしている。

背もたれと座面角度が調整できるティルト・リクライニング介助型と、ひじ置きと脚部が動かせる多機能介助型の2種類から選択。

特別養護老人ホームすばる醍醐(京都市伏見区)は前者を選び、白石真古人・同事業団常務理事が入居者の試乗に寄り添った。吉野鍾八施設長(59)は「離床機会が増え、座

京滋の特養へ車いす贈る
計7台、メリハリある生活後押し
だより事業団



位保持が困難な方にもメリハリのある生活をしてもらえる。不足していたので助かります」と話した。

他の贈呈先は次の通り。

鳥羽ホーム(南区)、まどかⅡ番館(伏見区)、マ・ルート(宮津市)、南天(大津市)、あじさいの郷(長浜市)、えんゆうの郷(草津市)

京都新聞おでかけ公演

(2025年3月31日付 京都新聞朝刊)

プロのデュオ演奏に手拍子

草津の事業所で「おでかけ公演」



京都府、滋賀県内の障害のある人や高齢者の施設や団体などを訪ね、楽しいひと時を過ごしてもらう「おでかけ公演」(京都新聞社会福祉事業団主催)が、このほど草津市の社会福祉法人こなんSSNシェスタで行われた＝写真。

外出がしにくい人たちのためにと、2006年度から演奏会などの催しをプレゼントしている。本年度は、障害のある人と高齢者の各2団体で実施された。

同事業は、本紙掲載の「善意の小箱」や企業・団体からの「記念日おめでとうコーナー」などへの寄付金を基にし

ている。

公演は、京都フィルハーモニー室内合奏団に所属するバイオリンストの森本



真裕美さんとファゴット奏者の田中裕美子さんによるデュオ演奏会。クラシックの名曲や童謡など11曲が披露され、施設を利用する障害のある人たちが、演奏に合わせて知っている曲を口ずさんだり、手拍子をとったりして楽しんだ。施設長の田中悦代さんは「利用者の皆さんとプロの演奏が聞ける機会がないので、すてきな時間が過ごせました」と話した。



◆子どもたちのための事業

子どもたちの健全な成長と明るい未来を支えるため、当事業団では多彩な活動を展開しています。児童養護施設へのレクリエーション支援や卒業お祝い金の贈呈、交通遺児への支援、親子で楽しめる子どもシアターの開催など、子どもたち一人ひとりの笑顔と希望を育む取り組みを行っています。これらの活動を通じて、子どもたちが安心して学び、遊び、成長できる環境づくりに努めています。

◇助成事業

「児童養護施設の子どもたちのレクリエーション」助成（9月～翌年3月）..... 12頁

京都・滋賀の全児童養護施設に対し、レクリエーション活動を助成

「児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（3月）..... 13頁

中学・高校の卒業とともに京滋の児童養護施設を巣立つ子どもたちに「卒業祝い金」を贈呈

「交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（3月）..... 13頁

交通遺児で小学校・中学・高校を卒業する子どもたちに「卒業祝い」として図書カードを贈呈

◇催 事

「京都新聞お楽しみ子どもシアター in 京都/in 滋賀」（8月）..... 13頁

京都・滋賀で人形劇などの公演を開催し、子どもたちを招待

児童養護施設レクリエーション（2025年4月22日付 京都新聞朝刊）

だより事業団 「あいすづくりがたのしかった。またいきたいです」。京都新聞社会福祉事業団が2024年度に実施した「児童養護施設レクリエーション」に参加した子どもたちから感謝の気持ちの寄せ書きや思い出をつづった作文などが届いた＝写真。

同事業は、京都、滋賀の全17児童養護施設に暮らす子どもを対象に1人2700円と引率費用1施設2万円を助成し、24年度は585人の子どもたちが参加した。



児童養護施設レク助成感謝の声届く

守山学園（滋賀県守山市）では、6グループに分かれて行き先を計画。高校生と小学生の女子のグループは自然の中にあるテーマパークに訪れ、頭脳や身体を使ってミッションを攻略しながらすすむ巨大迷路に挑戦したり、アイス作り体験や動物にふれあう旅行を楽しんだという。引率した職員は「子どもたちのたくさんの笑顔を見ることができ、成長を感じることができた」と感謝した。

同助成は、京都ゴルフ倶楽部（京都市北区）主催の「児童養護施設の子どもたちのために」と開催されているチャリティーゴルフ大会の参加者や企業からの寄付を主に、チャリティーコンサートや個人からの寄付金を活用している。

児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金
交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金
(2025年3月11日付 京都新聞朝刊)



卒業シーズンを迎え、京都新聞社会福祉事業団は、京都府、滋賀県内の16の児童養護施設を巣立つ中学生4人、高校生59人に「卒業お祝い金」として総額244万円を贈った。

お祝い金は「児童養護施設の子どもたちのために」と寄せられた善意をもとに、中学生に1人2万円、高校生に同4万円を贈呈している。高校生5人が卒業する京都市伏見区の桃山学園（畑段隆浩園長）では、同事業団の白石真古人常務理事が、代表の2人にお祝い金を手渡した＝写真。

卒業生は「将来、イラストやアニメ関係の仕事をする目標に向け、まずは就職が決まった会社でがんばりたい」「興味がある資産運用を扱う企業に就

16児童養護施設、巣立ちに「お祝い金」



職できた。新生活に必要なものに活用したい」などと夢や希望を語った。

京滋の交通遺児に「卒業お祝い」として、図書カードを小学生7人（1人5千円分）、中学生9人（同7千円分）、高校生11人（同1万円分）の計27人に京都府や京都市、おりづる会（滋賀県）を通じて届けた。交通遺児のために寄せられた寄付を活用している。

京都新聞お楽しみ子どもシアター
こどもミュージックアドベンチャー
(2025年8月25日付 京都新聞朝刊)

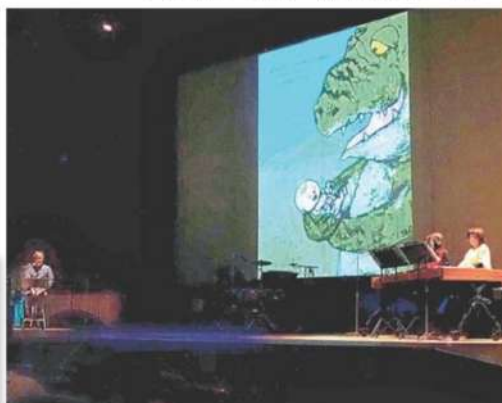


会場とパフォーマンスで盛り上がったコンサート
(守山市三宅町・守山市民ホール)

音楽と舞踊、朗読の催し「こどもミュージックアドベンチャー」が24日、守山市の守山市民ホールで開かれ、子どもたちと保護者ら約850人が鑑賞し、夏休みの楽しいひとときを過ごした。

音楽や踊り、朗読楽しむ
守山で催し 京滋の子どもら招待

京都新聞社会福祉事業団と守山市文化体育振興事業団の共催。打楽器・マリンバ奏者の宮本安子さんと、打楽器奏者やダンサー、朗読の「仲間たち」が舞台で演奏と踊りを繰り



朗読とマリンバ演奏による音楽物語「かいじゅうのすむしま」

後半は、絵本作家谷口智則さん原作の音楽物語「かいじゅうのすむしま」を上演。スクリーンに映し出された絵本とともに、朗読とマリンバ演奏が繰り広げられ、子どもたちは

広げた。さらに、会場と一体となって打楽器とダンスのパフォーマンスをつくり上げ、盛り上がった。

物語の世界に引き込まれていた。
(岩本敏朗)



◆子育て応援事業

子どもたちの健やかな成長と、子育て中の保護者を支えるため、当事業団では二つの助成事業を実施しています。

◇助成事業

「子育て仲間を応援」助成（7月） 15頁

子育て中の保護者が交流し支え合うサークルや支援グループを対象に、1団体2万円を助成。2024年度は80団体に総額160万円を贈呈しました。2005年度に開始以来、情報交換や交流の場を支援しており、少人数グループにも助成する独自の制度として好評を得ています。

「子育て事業助成」助成（7月） 15頁

京都・滋賀で子育て支援を行う非営利団体を対象に、講演会や学習会、イベントなどの事業に対し、1団体あたり15万円を上限に助成。2024年度は17団体から応募があり、子ども向けキャンプや文化体験事業、お話会や音楽会、親子で楽しむゲーム、映画上映会、人形劇など、計13事業に83万8000円を助成しました。



子育て仲間を応援助成・子育て事業助成

(2025年5月26日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杭泊柏樹

子育て応援事業

京都新聞社会福祉事業団は毎年、京都府、滋賀県で工夫を凝らして子育てに取り組むグループに助成する「子育て仲間を応援」と、催しなどを支える「子育て事業助成」を行っている。2024年度はこんな支援を行った。

京都市南区を拠点に活動する団体「空き家バンク京都子ども食堂」は昨年8月、京都市下京区の「ひと・まち交流館京都」で、文化体験事業として京都フィルハーモニー室内合奏団のメンバーを招いたコンサートを開いた。「子育て事業助成」は会場費や出演者費用などの一部に充てられ、未就園児や小学生の親子など約1000人が参加し、昼食弁当も配布した。

担当した井上久美さん(40)は



「私たちは普段は食を中心にした子育て支援活動を行っています。が、今回はプロの演奏を聴き、バイオリンなどの楽器にも触れられることができる貴重な体験でした。このような支援が得られれば、親子で楽しんでもらえ、豊かな経験となるような事業を、続けてい

という舞台で、約70人が鑑賞した。メンバーの一人、大谷智子さん(54)は「助成支援金は会場費やチラシ費用、出演など協力を受けたグループの謝金などに役立った。母親も楽しめる舞台となり、リフレッシュできた」との声が多く寄せられた。今後も機会があれば

京田辺市内で開かれた舞台「親子deミュージカル」に、鑑賞した親子も大喜びだった(2024年12月) 提供

きたい」と今後への抱負を抱いている。

子どもを対象に音楽や美術で次世代育成活動を行っている京田辺市のグループ「family arm」は、昨年12月、同市内で幼児から小学生など子育て中の親子を対象にした「親子deミュージカル」を開いた。生で歌や楽器演奏を楽しんでもらおう

親子で音楽に親しむ 充実した催しの一助に

育児中のリフレッシュにも 今年度申請30日まで

同じような舞台を企画したい」と話している。

「仲間を応援」助成を受けた団体「梅津・北梅津地域子育てサロン」は、右京区の梅津児童館と梅津北児童館を会場に、幼児と母親の心身のリフレッシュと楽しみを目的にした催し「ちよつと来てみませんか」を隔月で合計6回開いた。代表の梅谷理江さん(46)は「助成金はチラシやポスター制作費と講師の礼金の一部に充て役立ちました。合計で90人ほど参加していたとき、リズム遊びや体操などで親子ともに心身をほぐしてもらい、笑顔で帰ってもらったことが充実した催しになりました」と手ごたえを語っている。

同じく「仲間を応援」助成を得た京都市伏見区のグループ「ひとつながり」は、代表の酒井美夢さん(40)の家を主な会場に、乳幼児など子育て中の母親を支援する催し「ママの居場所づくり」を月に2回ほど合計20回余り開き、延べ約90人が参加した。酒井さんは「私自身も母親の立場でうちとけて、おしゃべりしながら互いの思いを共有し、ひと思つける場所にできたのがよかった。今後も継続していきたい」と言う。

24年度は「子育て仲間を応援」で80団体(京都市内15、府内34、滋賀県内31)に一律2万円総額160万円を、「子育て事業助成」で15万円を上限に計13事業(市内4、府内4、県内5)に総額83万5千円を助成した。25年度の申請は30日まで受け付けている。



◆福祉活動支援事業

地域福祉の充実を図るため、当事業団では多様な福祉活動を支援しています。

「京都新聞福祉活動支援」助成（2～3月）..... 17頁

京都・滋賀の福祉施設や団体を対象に、「運営支援」と「設備支援」の2部門で助成を行い、地域福祉の向上を目指します。支援対象は、障害のある人、高齢者、子ども、難病患者、生活困窮者の支援に取り組む団体など幅広く、1団体あたり50万円を上限に助成します。選考委員会では、地域福祉への貢献度、事業の推進力、期待される成果などを基準に審査し、助成先を決定します。

2024年度は、京都の企業から「障害のある人たちのために役立ててほしい」と500万円の寄付を受け、障害者団体や当事者団体5団体に各100万円を贈呈する特別枠を設けました。これにより、当初の助成額500万円と合わせ、総額1000万円の助成を実施しました。

京都新聞オーシャン号贈呈事業 贈呈式 2025年9月10日付 京都新聞朝刊



福祉車両8台 京滋8団体に贈呈

京都新聞社福事業団 貿易商社会長寄付基に

京都新聞社会福祉事業団（京都市中京区）は9日、貿易商社オーシャン貿易（同区）の米田多智夫会長から受けた寄付を基に購入した福祉車両8台の贈呈式を、京都日産自動車南店（南区）で行った。就労支援事業所や児童福祉施設などで、利用者の送迎などに役立てられる。米田会長は昨年、地



オーシャン貿易の米田会長（右から2人目）からの寄付を受け、社会福祉法人などに寄贈された福祉車両。京都市南区・京都日産自動車南店

域福祉や若者支援に役立ててほしいと個人で50万円を寄付した。同事業団は基金を創設し、3千万円で8台の車両を購入。オーシャン号と名付け、選考を経て、障害者や高齢者、児童の支援に取り組む京都と滋賀の計8団体への寄贈を決めた。贈呈式で米田会長は「地域の皆さんの生活のお役にたてれば幸いです」と願いを語った。寄贈を受けた団体の代表者たちは「通所者の自宅送迎に役立てたい」「仲間たちに出かける楽しさを味わってもらいたい」と喜んでいた。以前に寄付を受けた1台を含めオーシャン号は計9台となった。寄付の残りの2千万円は同事業団の給付型の奨学金事業に活用する。（近藤大介）

障害のある人の工賃増へ向けての取り組み助成

京都新聞福祉活動支援助成

(2025年4月7日付 京都新聞朝刊)



京都新聞社会福祉事業団は、2024年度の「京都新聞福祉活動支援」と障害のある人の「工賃増へ向けての取り組み助成」両事業の贈呈式をこのほど、京都市中京区の京都新聞社で行った。写真。京都、滋賀両府県の福祉施設やボランティアグループなど39団体に総額1200万円を支援した。

福祉活動支援は同事業団の設立60周年を記念し、障害のある人の支援団体や当事者団体を対象に100万円を5団体に助成する特別枠と従来の上限50万円までを助成する運営、設備両部門で申請を受け付けた。特別枠5団体（申請9団体）に計500万円、運営16団体（同21団体）に計255万円、設備7団体（同14団体）に計245万円、計28団体に総額1千万円を助成。高齢者や難病患者、不登校の子どもたちの支援を行う団体の活動費や障害者施設の老朽化した設備品の購入などに支援した。

工賃増助成では、障害のある人の工賃増につながる活動を支援しており、11団体（申請20団体）に計200万円を助成。お菓子などの商品を密閉するシーラー購入や下請け作業の除草に使用する草刈り機、革製品の縫製に使用するミシンの購入などを支援した。

助成団体は、次の通り。

◇京都新聞福祉活動支援
【特別枠】
【運営】京都市身体障害者団体連合会（京都市中京区）、Refra me（同）

【設備】からしだねワークス（山科区）、地域活動支援センターいづみ（木津川市）、京都フォーライフ（京都府久御山町）

【運営部門】
障害者芸術推進研究機構（京都市北区）、つるかめ笑顔クラブ（上京区）、京都府網膜色素変性症協会（中京区）、全国パーキンソン病友の会京都府支部（同）、サークルたんぼほ燦燦会（同）、お客様がいらっし

ともに生きる

京都新聞社会福祉事業団だより

福祉活動支援や工賃増へ 39団体支援

やいました。（下京区）、子ども会・少年団を育てる左京センター（左京区）、ハンド&ネイルケアボランティアチームガンチャー（同）、助けあいグループりぼん（東山区）、ジョイント西京視覚障害者ボランティア（西京区）、笑顔を届ける天使たちボランティアキッズ（伏見区）、京都子育てネットワーク（同）、達坂アモーレ子ども食堂（大津市）、香こちkokochi（同）、JAGUARの部屋（草津市）、竜法師村おこしの会にんにん広場（甲賀市）

【設備部門】

Salut（京都市上京区）、障害福祉サービス事業所ちくも（福知山市）、志津川福祉の園（宇治市）、城陽市の精神保健福祉をすすめる会野の花（城陽市）、城山共同作業所（南丹市）、異才ネットワーク（大津市）、宅老所心（草津市）

◇工賃増へ向けての取り組み助成
就労継続B型事業所つくしハウス（京都市上京区）、うさぎりんご（中京区）、就労継続支援B型事業所カラフルラット（南区）、京都市やましな学園（山科区）、就労支援事業所ひこばえ（右京区）、京都ふれあい工房（伏見区）、ともの家（綾部市）、宇治作業所のびのび（宇治市）、B型支援事業所カイクウM（大津市）、自立就労センターパレット・ミル（栗東市）、自立訓練事業所かけはし・生活介護事業所うらら（高島市）

※「障害のある人の工賃増へ向けての取り組み」助成は、2025年度以降は休止しております。

7 顕彰



◆京都新聞福祉賞・福祉奨励賞

(贈呈式1月) 18・19頁

京都府および滋賀県において、地域福祉の向上に著しい功績のあった個人または団体を対象に「京都新聞福祉賞」を、また、活動歴10年未満の若い団体等で、今後の活躍が期待される個人または団体を対象に「京都新聞福祉奨励賞」を贈り、顕彰しています。

本事業は、1965年の事業団設立と同時に「京都新聞社会福祉功労者表彰」として開始し、今年で61年目を迎えます。2024年度の設立60周年を機に、京都新聞との連名主催とし、京都新聞グループ全体で支える体制へと発展させ、実施しております。

贈呈額は、福祉賞が個人20万円、団体30万円、奨励賞は個人・団体ともに10万円です。推薦は新聞紙面等を通じて公募し、選考委員会において決定します。これまでに個人192件、団体78件、計270件（2025年度時点）を表彰してきました。

2025年度は、福祉賞2団体・福祉奨励賞2団体に贈呈をしました。



京都新聞福祉賞・京都新聞福祉奨励賞 贈呈式

(2026年1月27日付 京都新聞朝刊)

「新たなつながりで前を」

京都新聞福祉・奨励賞贈呈式

社会福祉の向上に貢献した団体や個人を表彰する「京都新聞福祉賞」と、将来のリーダーとして期待される若い世代に贈る「京都新聞福祉奨励賞」の贈呈式が26日、京都市中京区のハートピア京都であった。福祉賞2団体、奨励賞2団体の功績をたたえた。

京都新聞と京都新聞福祉事業団が毎年



京都新聞福祉賞の表彰を受ける全国心臓病の子どもを守る会京都支部の石神支部長(左)＝京都市中京区・ハートピア京都 撮影・三木千絵

実施し、61年目。今年の福祉賞は、心臓病の子を持つ親が交流する「全国心臓病の子どもを守る会京都支部」(上京区)と、摂食障害を抱える人の自助グループ「あかりプロジェクト関西」(舞鶴市)が選ばれた。

福祉奨励賞は、京都市大生らで続けることも食堂「からふる」(左京区)、働く大人を小学生が取材し「子ども新聞」を発行する「i note+P」(伏見区)に贈られた。

式では、同事業団理事長の大西祐資・京都新聞社長が「当事者に寄り添い、安心と希望を与えた」とたたえ、

(田中恒輝)

賞状を手渡した。

受賞スピーチで、全国心臓病の子どもを守る会の石神彩乃支部長

(51)は「リアルな人間関係を敬遠する風潮で、つながりを求めても一歩を踏み出せない人がいる。心強く温かな場所があると知って

新たなつながり、前を向く人が増えていくと信じている」と述べた。



公益財団法人 京都新聞社会福祉事業団

京都市中京区烏丸通二条上ル蒔絵屋町260

京都新聞トラストビル 4階

TEL 075 (241) 6186 / FAX 075 (222) 2515



ホームページ
が新しくなりました



X公式アカウントを
フォローしよう



電子決済による
寄付受付をはじめました